

近世東北における陸奥国二本松藩町村の人口移動の空間的広がり

長岡 篤（麗澤大学経済社会総合研究センター）・
黒須 里美（麗澤大学）・高橋 美由紀（立正大学）

キーワード：人別改帳、人口移動、移動理由、GIS データ

要旨

人口・家族史研究プロジェクトでは、福島県の「人別改帳」をベースに構築された「ザビエルデータ」(Xavier data) を用い、歴史人口学データの中でも稀有な人々の「移動」情報を整理しデータベース化している。本稿はその中の郡山上町と周辺の3農村（下守屋村、仁井田村、日出山村）を対象に行った出身町村を越えた、人々の「移動」情報（移動理由、年代、移出先・移入元の村）に焦点をあて、移入元・移出先の町村の場所の比定の経緯と基礎分析結果を整理する。歴史データにGISを適用することで、移動の空間的広がりを把握し、移動理由と年代による変化から4町村の特徴を明らかにし、今後の研究の広がりを議論する。

1. はじめに

近年歴史人口学では、データベースの構築とそれを利用した様々な研究が実施されてきた¹。日本では、1995年に始まった「ユーラシアプロジェクト」²において、近世日本の人口史料の組織的収集・整理と一部の本格的なデータベース化が行われた。本稿で扱う「ザビエルデータベース」(Xavier data)³はユーラシアプロジェクトにおいて研究に活用された1708-1870年という長いスパンをカバーする現在の福島県の「人別改帳」をベースに構築された歴史人口学データである。原資料の人別改帳は現在の国勢調査（静態統計）と出生・死亡・移動などの動態統計を合わせたような記録である。このうち、二本松藩（現在の福島県二本松市・本宮市・郡山市を中心とする）のデータは、正確な人別改がなされたとされ（成松 1992, 1985）、福島県郡山市周辺を対象とした歴史人口学の研究が多く行われてきた（高

¹ 本稿は麗澤大学の文部科学省（MEXT）私立大学戦略的研究基盤形成事業「人口・経済・家族の長期的研究：多世代パネルデータベース構築」（H27-31 代表 黒須里美）の一環として人口・家族史研究プロジェクトにおいて整理された史料とデータを用いている。

² 文部省科学研究費創成的基礎研究：代表・速水融「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」1995-1999年度。

³ 詳細は黒須里美・高橋美由紀・長岡篤（2017）を参照。

橋 2005 など)。

麗澤大学の人口・家族史研究プロジェクト (以下、PFHP) では、このザビエルデータを用い、人々の「移動」情報を整理してきた。ザビエルデータのもつ人々の詳細な「移動」情報 (移動理由、年代、移出先・移入元の村) は、世界における歴史人口学データの中でも非常に稀有であり、貴重なものである。しかし、ザビエルデータの移動に関する研究は、原資料と数値化されたデータの両方を理解することが必要であり、それぞれの段階での移動情報を移出と移入に分けて整理することが必要であることから、これまであまり利用されてこなかった (Tsuya&Kurosu 2004, 高橋 2005)。PFHP では、移動に関係する町村の場所を比定し、歴史的な人口移動情報として GIS を適用したデータ整備と分析を試みている。

本稿では、ザビエルデータのうち、宿場町である郡山上町とその周辺農村である仁井田村、下守屋村、日出山村を対象として、人の「移動」に焦点を当てる。「移動」の理由には、奉公などの労働契約を含むものから、結婚、養子縁組、寺社への参詣など様々なものが含まれることから、移出先と移入元の町村を把握することで 18 世紀から 19 世紀に生きた人々の出身町村を越える空間的な動きを捉えることが可能である。そこで、まずザビエルデータに表れる町村の場所を比定し GIS データとして整理し、これらの町村における周辺地域との人々の移動について、空間的広がりや移動理由と年代による変化から明らかにすることを目的とする。

2. 町村の場所の比定

2.1. GIS データの現状

地理情報システム (GIS) と GIS データは、国や地方自治体における行政の様々な分野や民間事業者による各種サービス、大学・研究機関において使用されてきた。国が作成・整備する GIS データは、国土地理院の「基盤地図情報サイト」や政府統計 e-Stat の「地図で見る統計 (統計 GIS)」、国土交通省の「国土数値情報ダウンロードサービス」などで、無償で公開されている⁵。また地方自治体においても独自に GIS データを作成しており、利用申請をすることにより有償または無償で利用可能な場合がある。しかし、これらのデータは基本的には現代のデータである。HGIS 研究協議会編『歴史 GIS の地平』(2012) などでは、様々な研究者が江戸時代の人口に関するデータベースの構築や地図上での可視化を行っているが、歴史人口学で使用できる明治以前の統一されたデータは、ほとんど蓄積されてきていない。

⁴ 本稿では、他の村から 4 町村への人の移動を「移入」、4 町村から他の村への移動を「移出」とし、両者を合わせて「移動」とする。

⁵ 2020 年 5 月現在。国土地理院「基盤地図情報サイト」：<https://www.gsi.go.jp/kiban/>、地図で見る統計 (統計 GIS)：<https://www.e-stat.go.jp/gis/>、国土交通省「国土数値情報ダウンロードサービス」：<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/>

2.2. ザビエルデータに表れる町村の比定方法

ザビエルデータを用いて人々の移動を把握するためには、町村名を元に場所を比定する必要がある。そこで移出先と移入元の町村名を元に、各町村の代表点と考えられる座標（緯度及び経度）を比定⁶した。比定は、現在も使用されている地名は国土地理院の地理院地図上で照合し、各町村または町丁目の中心と考えられる場所の座標を取得した。現在は失われた地名は、歴史地図（主として明治・大正期の旧5万分の1地形図、迅速図<明治初期に大日本帝国陸軍参謀本部陸地測量部作成の簡易地図>、城下絵図等）を参照し、地形的に同じと考えられる集落の中心の座標を取得した。また、重心や中心部を特定することが難しい場合は、旧集落名に関する神社などの近くで座標を取得した。その結果、比定を試みた1,472町村のうち、約9割の1,342町村を比定できた。比定ができなかった村は、越後国蒲原郡に位置する村などが多く含まれ、地名も失われているため、歴史地図でも把握できなかった村である。以上を踏まえて、町村の場所（緯度及び経度）、国名、郡名、移動の年代別・移動理由別・性別毎の移出入数などを整理し、GISデータを作成した。

3. 分析対象とする移動データ

以上のデータ整理と移動に関する町村の場所の比定の結果、把握できた4町村に関する移動のうち、「戻り」⁷を除外した4町村と移出先・移入元の町村数1,450、移出先・移入元の町村数と町村間の移動数20,215を扱う。これらには、1720年から1869年の約150年間の移動が含まれている。郡山上町と3町村の概要及び集計結果を表1に示す⁸。なお本稿では移出・移入の「率」ではなく「実数」を用いて人の移動の空間的広がりを明らかにする。

表1 郡山上町と3町村の概要及び集計結果

	原資料	位置づけ	期間(年)(欠年)	計(人・年)	移出先・移入元の町村数	町村間移動数
郡山上町(安積郡)	陸奥国安積郡郡山上町人別改帳(郡山市歴史資料館所蔵 今泉家文書)	・1824年に町場昇格した在那町(支配上は農村に立地しながら都市的要素をもつ) ・宿場町として繁栄(旅籠屋・造酒屋・太物屋・質屋などの商売)し、幕末には養蚕・製糸業も発達、周辺村落の経済的中心	1729-1870(18)	194,878	991	12,203
仁井田村(安達郡)	陸奥国安達郡仁井田村人別改帳(個人所蔵 遠藤家文書)	郡山上町とは異なる郡(安達郡)に位置する奥州街道沿いの農村	1720-1870(4)	67,130	178	3,671
下守屋村(安積郡)	陸奥国安積郡下守屋村人別改帳(郡山市歴史資料館所蔵 水山家文書)	郡山上町、仁井田村とは異なった移出・移入の傾向がある可能性	1716-1869(9)	48,755	113	2,016
日出山村(安積郡)	陸奥国安積郡日出山村人別改帳(郡山市歴史資料館所蔵資料 佐藤家文書)	郡山上町と同じ郡(安積郡)に位置する奥州街道沿いの農村	1708-1870(35)	35,937	168	2,325
計	-	-	-	346,700	1,450	20,215

⁶ 原資料の情報から国・郡・村名を特定する経緯については、黒須・高橋・長岡(2017)、また本号の黒須に詳しい。移出先・移入元の町村の緯度・経度の把握は、(有)地域・研究アシスト事務所(現CR-ASSIST)に委託した。

⁷ 結婚・養子、奉公などで移出・移入した人が、出身町村に戻ることを意味し、定住した人ではないと考えられることから、本稿では除外した。

⁸ 「欠年」は何らかの事情で人別改帳が残存していない年を示す。「人・年」は分析単位で、1人1年の情報を1人年と数える。詳細は黒須・高橋・長岡(2017)を参照。

4. 移動の空間的広がり

4.1. 年代による移動数の推移

1720年から1869年の移動を10年毎に集計した結果を図1に示す。郡山上町は、10年毎に約900～1,000の移動数があり、1824年の町場昇格前後に大きく増加している。また1780年代の天明の飢饉と1830年代の天保の飢饉後は、移動数は減少している。仁井田村、下守屋村、日出山村は、18世紀はほぼ一定の移動数で推移したものの、19世紀になるといずれも減少傾向となり、仁井田村は1/5、下守屋村と日出山村は半数以下になっている。

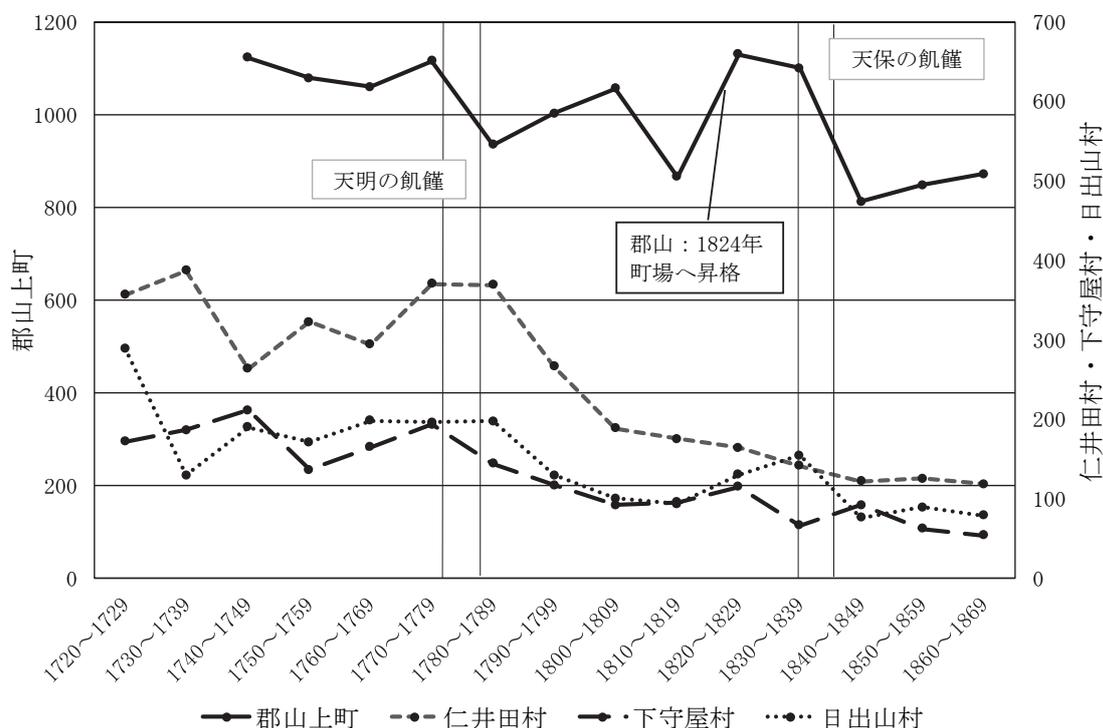


図1 年代別移動数の変化

移出・移入の理由を、「結婚養子」「奉公」「その他」に分類⁹し、1800年前後で分けた移動数を表2に示す。郡山上町は、どの移動理由でも移出より移入が2倍以上多い。1799年以前と1800年以降を比較すると、奉公による移入が約半分に減少する一方、結婚養子とその他では1.5倍近く増加している。このことから、1824年の町場昇格までは奉公を中心とした移入が、その後は結婚養子とその他の理由による移入が人口増加につながったと考えられる。仁井田村は、1799年以前は奉公による移入が多いものの、これらの移動数は1800年以降になると減少し、結婚養子による移入が増加する。下守屋村は、1799年以前は奉公による移出が多いが、1800

⁹ ザビエルデータでは移動理由を約30種類に分類しており、本稿ではこれらを「結婚養子」「奉公」「その他」にまとめた識別コードを用いた。

年以降になると結婚養子の移入が多くなる。日出山村は、1799年以前は奉公による移入が多いが、1800年以降は結婚養子と奉公による移出入がほぼ同じ移動数である。

表2 年代別・移動理由別の移動数

移動理由		1799年以前	1800年以降	計	移動理由		1799年以前	1800年以降	計
		移動数	移動数				移動数	移動数	
郡山上町	結婚養子_移入	843	1,281	2,124	下守屋村	結婚養子_移入	282	223	505
	結婚養子_移出	333	628	961		結婚養子_移出	164	96	260
	奉公_移入	3,396	1,614	5,010		奉公_移入	176	49	225
	奉公_移出	433	237	670		奉公_移出	675	153	828
	その他_移入	1,254	1,697	2,951		その他_移入	83	53	136
	その他_移出	250	235	485		その他_移出	60	2	62
	計	6,509	5,692	12,201		計	1,440	576	2,016
仁井田村	結婚養子_移入	390	338	728	日出山村	結婚養子_移入	208	236	444
	結婚養子_移出	294	252	546		結婚養子_移出	170	250	420
	奉公_移入	631	120	751		奉公_移入	638	66	704
	奉公_移出	858	223	1,081		奉公_移出	300	62	362
	その他_移入	301	57	358		その他_移入	187	93	280
	その他_移出	145	54	199		その他_移出	75	40	115
	計	2,619	1,044	3,663		計	1,578	747	2,325

4.2. 移動の空間的広がり

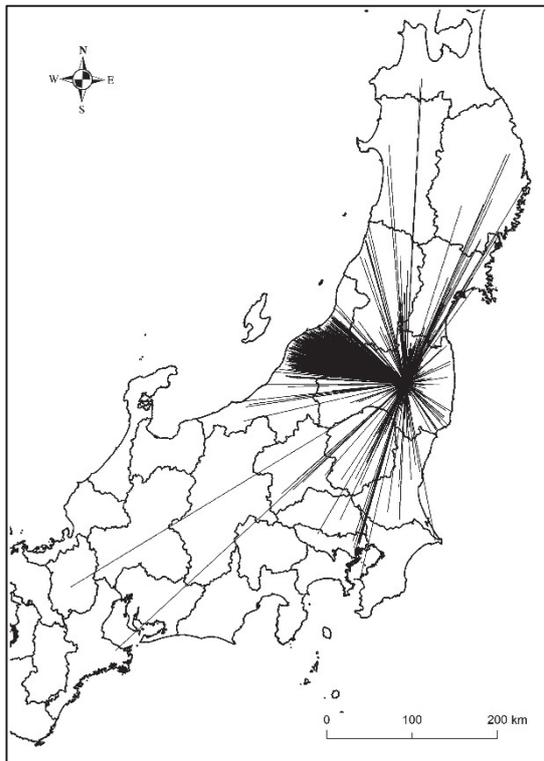
移出先・移入元町村の所在地を、現在の都県で集計した結果を表3に示す。また移出先・移入元町村の所在地を図2に示す。4町村全体では福島県内での移動がもっとも多く80%を占め、次いで新潟県との移動が18%である。

郡山上町は福島県内の移動が71%、次いで新潟県との移動が27%ある。青森県や秋田県、宮城県といった東北地方の離れた県や関東地方への移動もみられ、広く東日本の町村との移動があったことがわかる。一方、仁井田村、下守屋村、日出山村は福島県内の移動が90%を超えており、仁井田村と日出山村で秋田県や関東地方、富山県などとの移動が極少数みられる程度であり、宿場町として発展した郡山上町とは大きな違いがある。

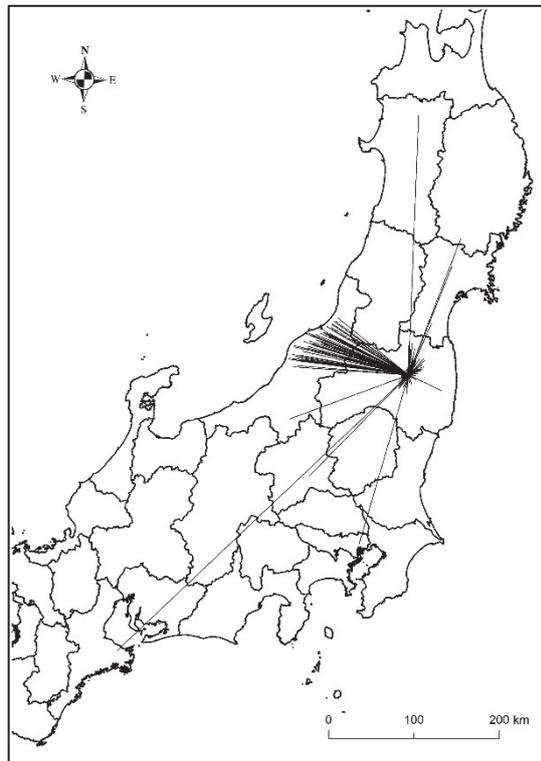
表3 移出先・移入元の町村が所在する現在の都県別の移動数

移出先・移入元の町村が所在する現在の都県	計	郡山上町	仁井田村	下守屋村	日出山村
東北 (福島県以外)	191 (1%)	176 (1%)	14 (0%)	0 (0%)	1 (0%)
福島県	16,226 (80%)	8,671 (71%)	3,409 (93%)	1,981 (98%)	2,165 (93%)
関東	106 (1%)	88 (1%)	1 (0%)	3 (0%)	14 (1%)
新潟県	3,681 (18%)	3,262 (27%)	244 (7%)	32 (2%)	143 (6%)
その他	11 (0%)	6 (0%)	3 (0%)	0 (0%)	2 (0%)
計	20,215 (100%)	12,203 (100%)	3,671 (100%)	2,016 (100%)	2,325 (100%)

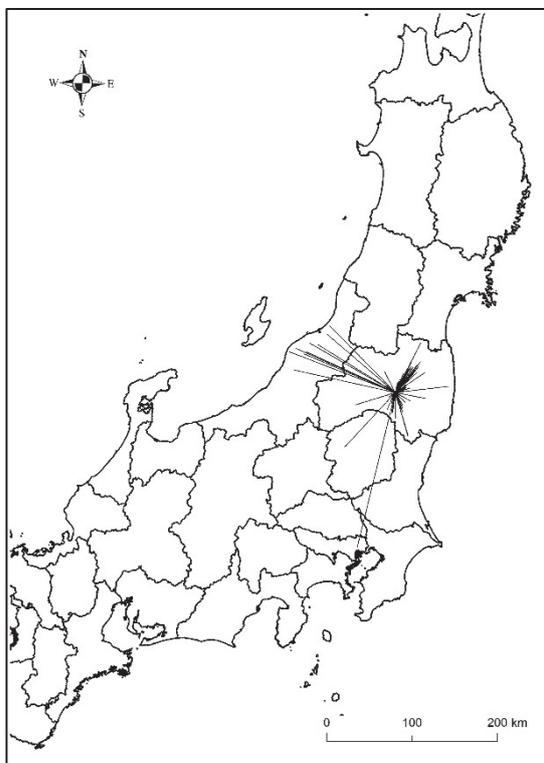
東北：青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県 関東：茨城県、栃木県、埼玉県、千葉県、東京都
その他：富山県、三重県、滋賀県、和歌山県



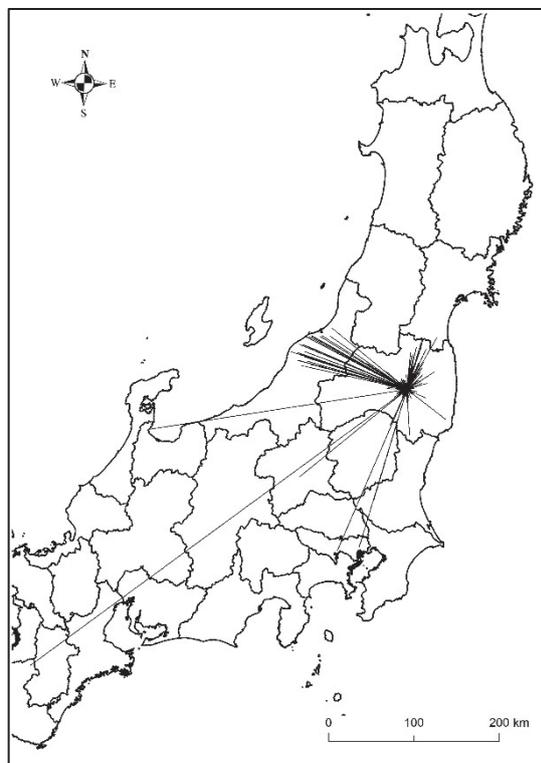
郡山上町の移出入先



仁井田村の移出入先



下守屋村の移出入先



日出山村の移出入先

図2 4町村と移出先・移入元とする町村の距離

4.3. 移出先・移入元の町村の距離

人々の移動がどのような距離で行われていたのかを把握することは、現代であれば鉄道や道路の詳細な GIS データが作成・公開されていることから容易である。しかし、江戸時代の街道などの道路網を全国レベルで正確に作成することは困難である。そこで人々の移動距離を、4 町村と移出先・移入元の町村の直線距離として捉え、GIS ソフト上で計測し 6 種類に分類¹⁰した。距離別、移動年別、移動理由別に集計した結果を図 3 に示す。また各町村から概ね 0～50km 以内に位置する移出先・移入元の町村の分布を図 4 に示す。

郡山上町における 1799 年以前の移入は、0～4km 以内の奉公による移入がもっとも多く、次いで 50km 超（越後国）、引越などその他の理由が約 5 割を占めている。1800 年以降は、50km 以内に位置する町村からの移入は減少するものの、50km 超に位置する町村からの移入はいずれの理由でも増加し、特に奉公とその他による理由が増加している。一方、移出は移入と比べると 20km 超～50km 以内が移入とほぼ同じ移動数である以外は、どの距離でも少なく、特に 50km 超への移出はほとんどみられない。50km 超に位置する町村は、ほとんどが新潟県（越後国）に位置している。0～50km 以内の移出先・移入元の町村の分布をみると、12km 以内まではほぼ同心円状に分布しており、安積郡と田村郡に位置する町村と移動があったことがわかる。12km を超えると安達郡の二本松周辺の村など奥州街道沿いの村との移動が目立つものの、多くの町村で移動数は減少する。

仁井田村における 1799 年以前の移入は、0～4km 以内や 4km 超～8km 以内といった、近隣に位置する町村が多く、1800 年以降も同様である。50km 超からの移入は年代による移動数の差は少ない。移出も同じ傾向であり、結婚・養子と奉公の割合が高く、50km 超からの移入は約 100 あるが、移出はごく僅かである。0～50km 以内の移出先・移入元の町村は、奥州街道沿いの村との移動が大半であり、その他の地域との移動はほとんどみられない。

下守屋村は、奥州街道から約 10km 離れたところに位置するが、郡山上町などの奥州街道沿いとの移動が多い。1799 年以前の移入は、0～4km 以内がもっとも多く、結婚・養子の割合が高く、4km 超～8km 以内の移動理由も同じ傾向である。1800 年以降は 0～4km 以内の結婚・養子による移入が大半であり、4km 超からの移入は減少する。1799 年以前の移出は、20km 超～50km 以内の町村がもっとも多く、いずれの距離でも奉公が多い。1800 年以降はいずれの距離でも移動数は大きく減少する。0～50km 以内の移出先・移入元の町村の分布をみると、ほぼ 8km 以内に位置する郡山上町とその周辺の村との移動が多い。20km 超では安達郡の二本松周辺の村との移動が目立つ。

日出山村における 1799 年以前の移入は、0～4km 以内や 4km 超～8km 以内が特に多いが、これは郡山上町に近接しており、同町との移動が多いからである。1800 年以降になるとい

¹⁰ GIS ソフトには、有償、無償のものがいくつかあるが、ここでは広く使用されている ESRI 社の ArcGIS を使い、0～4km 以内、4km 超～8km 以内、8km 超～12km 以内、12km 超～20km 以内、20km 超～50km 以内、50km 超の 6 種類に分類した。

ずれの距離でも移入数は減少する。移出は、1799年以前は20km超～50km以内がもっとも多く、これは二本松藩への奉公による移動が大半である。1800年以降は、二本松藩への移出は減少するものの、0～4km以内の移動数が1799年以前と同じように多く、郡山上町との移動が継続していたといえる。

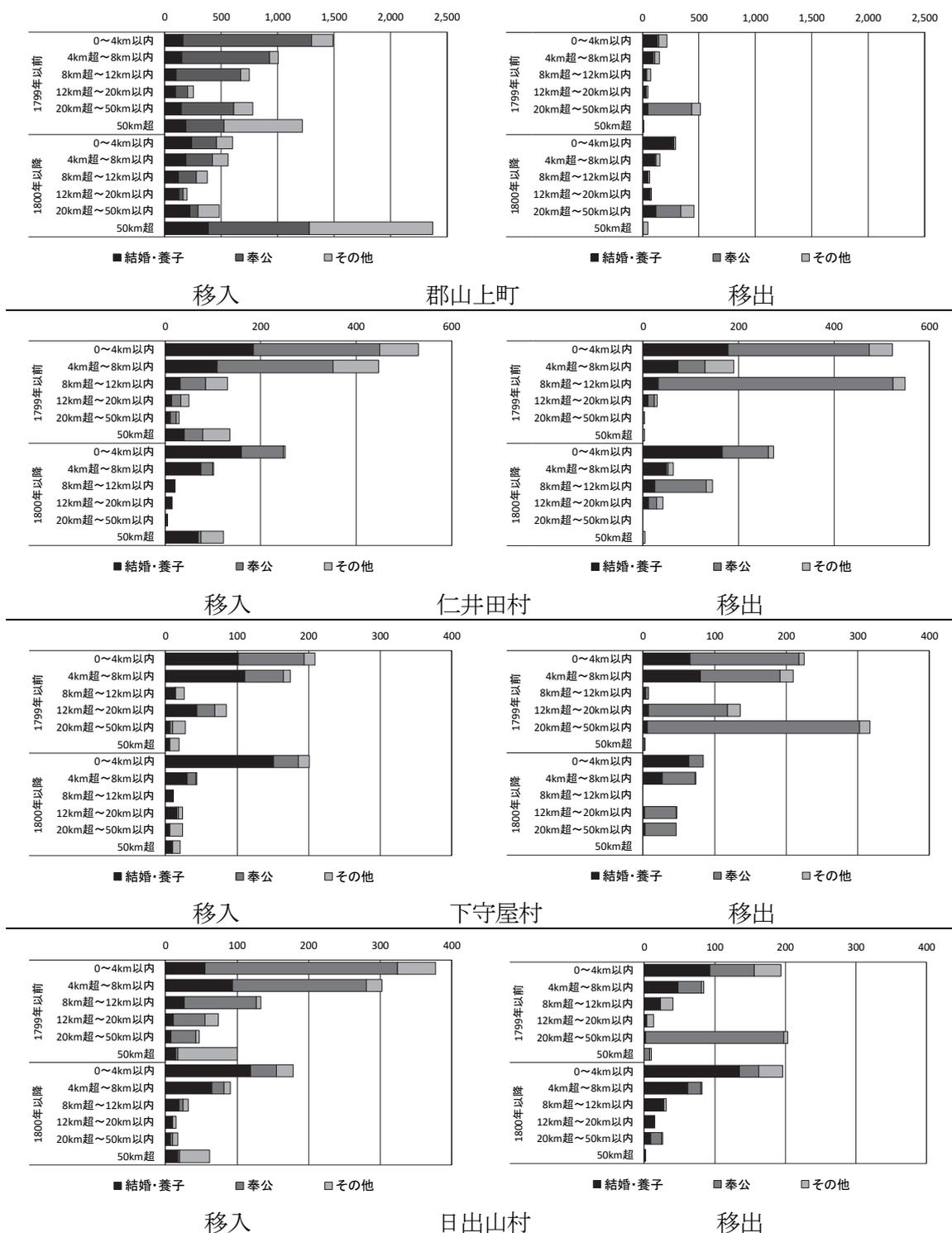
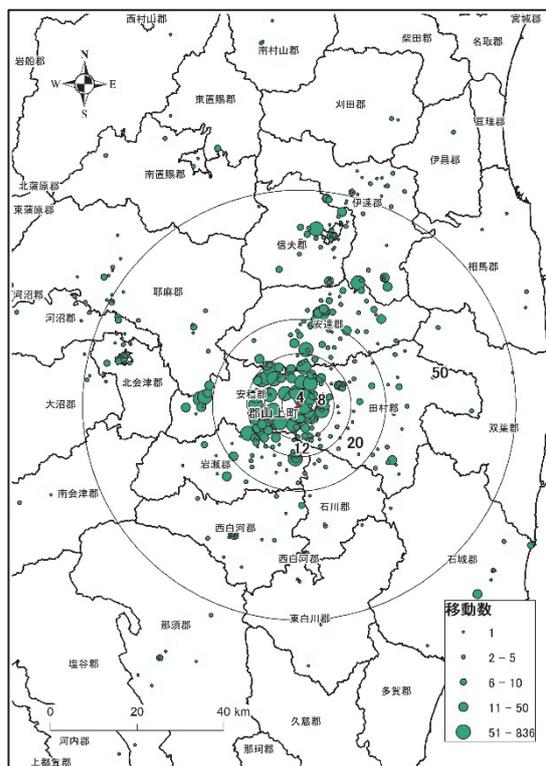
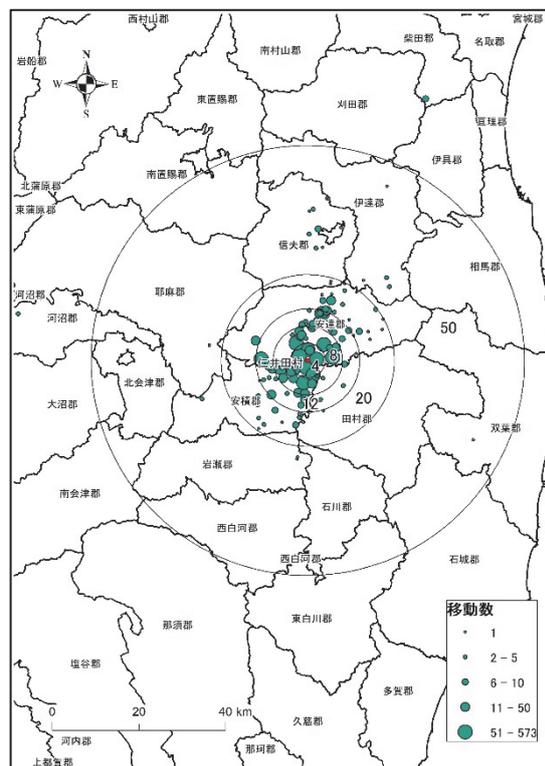


図3 移出先・移入元とする町村の距離別・時代別・移動理由別の移動数

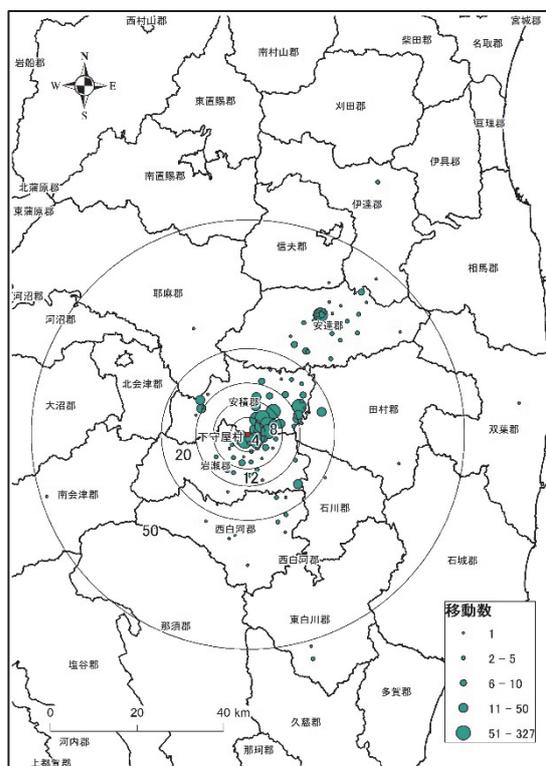
近世東北における陸奥国二本松藩町村の人口移動の空間的広がり
 長岡 篤・黒須 里美・高橋 美由紀



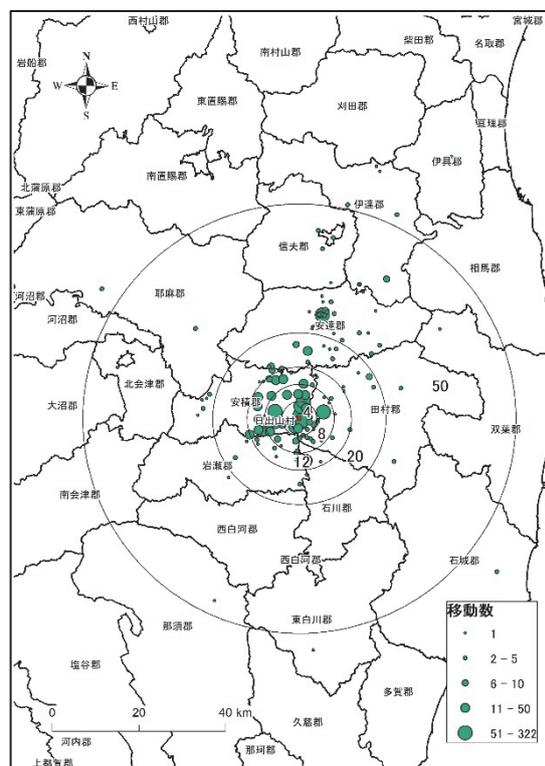
郡山上町



仁井田村



下守屋村



日出山村

図4 各町村から0~50km以内に位置する町村

5. おわりに

本稿では、郡山上町と周辺の3村を対象として、18世紀から19世紀にわたる人々の移動について、町村の比定を行った上で、年代別・移動理由別の空間的な広がりを明らかにした。その結果、現代のGISデータを用いたことや既に失われた地名があったものの、約9割の町村を比定でき、それらを用いた分析から全体的な移動の傾向が掴めたといえる。

人々の移出数・移入数には理由、年代により違いがあり、郡山上町では年代に関わらず50km超に位置する越後国からの移入数が多く、移入理由では19世紀になると特に結婚・その他による移入が増加した。日出山村では奉公による移入数が減少、仁井田村と下守屋村では奉公による移出数が減少し、これらの3村では一部の村との移動を除き、近隣との移出入が多くを占めていた。以上の町村間における相違や時系列的に観察される変化は、今後解き明かされるべき重要な研究課題を提起する。たとえば、藩の政策との関係、町村の規模、地理学的・社会経済的な差異による説明の可能性、さらに天明飢饉・天保飢饉の町村、特に人口への影響などである。

今後は、今回能わなかった町村の比定を進め、GISデータの拡充を行うことにより、人々の移動を広く明らかにするとともに、フリーのGISソフトでも使用が容易になるようにGISデータの整理を行う予定である。また、移動の地形的条件とともに、藩の規模や政策的な影響などを含めて分析を進め、時間軸と空間軸を合わせた人口・家族行動や、移動がもたらす都市形成や文化圏のつながりを示したい。

参考文献

- Dong, Hao, Cameron Campbell, Satomi Kurosu, Wen-Shan Yang and James Z. Lee. 2015 “New Sources for Comparative Social Science: Historical Population Panel Data from East Asia.” *Demography* 52(3):1061-88.
- HGIS 研究協議会編 2012 『歴史GISの地平』 勉誠出版
- 成松佐恵子 1992 『江戸時代の東北農村—二本松藩仁井田村』 同文館出版
- 成松佐恵子 1985 『近世東北農村の人びと—奥州安積郡下守屋村』 ミネルヴァ書房
- 高橋美由紀 2005 『在郷町の歴史人口学—近世における地域と地方都市の発展』
MINERVA人文・社会科学叢書
- Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu 2013 “Social Class and Migration in Two Northeastern Villages 1716-1870.” *The History of the Family*: 18(3):1-22.